

## 江戸期の民家集落・今井町を歩く

奈良県今井町の江戸期の民家集落を写真集で見て、一度は訪ねてみたかった。先日、朝早く今井町を訪ね、念願を果たした。今井町が大阪から、こんなに近いところだとは思っていなかった。まずは「今井まちなみ交流センター」に行き、多くの写真や映像を見た。そこで手にした『今井寺内町』と題した冊子の「はじめに」を紹介しよう。



奈良県橿原市今井町一民家建築に関心のある人達は一種の感慨をもってこの町の名を聞きます。全七百戸のうち国指定の重要文化財民家八軒を含めた、実に八割近くの民家が江戸時代の様式を保ち、中世の町並がこれほど整然と残されている処は、わが国ではほかにありません。卍状に交叉した幾筋もの街路には、風雪に耐えた重厚な本瓦葺の家並がぎっしりと密集し、薄暗い座敷に仄かな明りをもたらす蓮子、出格子や駒つなぎを残したままの古い商家の続く町並。くぐり抜けるべき格子戸はこの町には無数にあり、夕焼け空も、お寺の鐘も生きつづけている今井町は絵空ごとではない、まさしく“わたしの城下町、”といえましょう。



然しこの町に住む人達にとって、江戸期の町並とは、生活の不便さを意味しています。一立派なお住まいですね。一との褒詞は、一よくこの家で辛抱出来ますね一と同意語なのです。事実広い家程薄暗く、道路は狭くて一日中陽が射さない、昼間でも電灯をつけている。よそ目には美しい格子戸も現在では余り役にたっていない。雑巾がけでも大変である。高い建屋、吹き抜きの煙出しから舞込む粉雪、黒々とした大黒柱や風格のある小屋組みまでも、冬にはふるえそうに寒々しい。

然し町の人々は余り愚痴りません。お互いさまという事もあるが、この町に住む良さも心得ているからでしょう。一日中家で過ごす主婦達は「家庭電化の進んだ現在、多少の不便さは、かえって画一化や無味乾燥になりがちな主婦の生活をほぐしている。狭い道路や長屋建てが多いので、隣近所の人達との親近感がある。フスマや障子の間じきりはプライバシーが保てないと云うが、夫婦、親子の心の断絶が少ない。それに何と云っても風情のある通り庭(土間)や本間の広い間取りは、主婦を落ち着かせ、育児にも良い結果をもたらしています」と……。

かつて関野克博士は「日本の町や都市の中で、今井町は最も誇るべきものを持つ、それは大火がなかったからだ。私達の祖先が堂々として築きあげて来た市民的文化遺産を今井町程数多く残している町は他にない」と、話されていたが、私達は江戸時代の民家建築のもつ空間の「間」と、大火を出さないこの町の建築工法のすばらしさに感謝し、“現代の町に生きる、為、保存と開発の両面を顧慮し乍ら、新しいまちづくりを急がねばならないと思っています。

(2019年11月26日)